早期の生徒把握、目標設定で自主的な集団を作る

新年度のクラス運営に向けて

クラス替えによる引き継ぎから新年度のクラス運営のスタートについては、学校行事や学習・進路指導と異なり、学校で取り組む内容が細かく決まっていないことも多く、それだけに新担任となる個々の教師に負荷がかかる。教師にとって忙しい年度がわりの効率的、かつ効果的なクラス運営を考える。

生徒把握・教師間の情報共有化の長所、短所を見極める

生徒把握に関して、旧担任から新担任へ引き継ぐものは、生徒の校内試験・模試の成績、偏差値などが一般的なようだ。だが、これだけではその生徒がどの科目のどの分野が苦手で、どんな進路観を持っているのかがわからず、進級後、改めて把握することになる。

そこで例えば日ごろから生徒の学習、進路に関する成績や調査データを2枚ずつコピーして別々に保存しておき、1部をそのまま新担任に引き継げば、こうした難点もある程度取り除ける。

高校によっては学年全体の連絡会を設けて、生徒1人ひとりについてその性格、交遊関係などを申し送りするところもあるようだ。情報が共有化され、新担任の指導がしやすくなる効果もあるが、旧担任の生徒に対する印象がそのまま引き継がれ、新担任が先入観を持って生徒を見てしまう危険もある。踏み込んだところまで申し送りするときは、そのリスクを踏まえておきたい。

新学期が始まって最初の面談、特に1年次の最初の面談は、生徒把握の最も重要な場面といえる。「高校生活になじんだか」「趣味はなにか」「どんな部活に入ったか」「苦手な教科はあるか」といった話をして、生徒把握の糸口をつかむ。また、進路希望や学習の実態調査などを実施して、より客観的な生徒把握に努めるのもいいだろう。具体的な調査内容などは後半で述べたい。

クラス運営・具体的な活動目標を掲げて、生徒集団を引っ張る

活気ある、前向きなクラス作りは、担任の重要な仕事の一つ。例えば昼休みに勉強している生徒に対して、「なんでそこまでするの」と冷やかすような雰囲気がクラスにあったら、その集団はマイナスの価値観を共有していることになる。「努力して勉強するのはいいことだ」と生徒が受け入れ、プラスの価値観を共有する集団にしたい。

そのためにクラス目標を作ることも一つの方法だが、そこで「自主・自律」といった抽象的な価値観を大上段に訴えても、生徒の心には響いてこない。それを毎日の学校生活の中に落とし込んで説明し、具体的な活動目標にすることが大切だ。「自主・自律」を生徒の日常生活に置き換えて、「生徒同士、友達同士で勉強を教え合おう」「放課後残って勉強してごらん」と噛み砕いてもいいだろう。授業でわからない部分があった生徒はわかっている生徒に質問し、聞かれた生徒は親切に教えるというようにしむければ、生徒同士が教え合うことで、「自主・自律」の意味を集団の中で体で覚えるようになる。

また、クラス運営で忘れてならないのは、生活習慣の確立だ。基本的な生活習慣の身についていない生徒が多いといわれる中、この問題は避けて通れない。そうした生徒が多いとクラスの活気がなくなるし、生活習慣の確立が学習習慣の確立につながることはよく指摘される。まず、遅刻をしない、教室の掃除をするといったことをきちんとさせる必要がある。このことは何度でも伝えて徹底させたい。

学習指導・生徒に自分で課題を発見させ、学習目標を設定させる

学年初めは、まず学習習慣を身につけさせることが当面の目標であり、低学年の場合は特に重要となる。学習指導に限らず、指導の原点は、生徒に自分の頭で考えさせ、自分で解決の道を探らせることにある。学習習慣についていえば、生徒が自分の学習スタイルを振り返り、改善のための目標を自分で設定することが大切だ。それには学習状況調査などが有効な手がかりとなるだろう。そのあと、その目標がどのくらい達成できたか、1学期末ごろにLHRなどで検証させればいっそう効果が上がる。

新1年生は中学校時代の学習スタイルをそのまま引きずっている場合が多いので、中学校と高校の学習の違いを認識させることから始める。高校は、授業の進度が速く、内容も難しい。したがって、予習をしないとついていけないことを理解させたうえで、予習のやり方を具体的に教える。また、学習のポイントの一つはノート作りなので、ノートの作り方も指導するようにする。

2年生になると学力差が開き、それが固定化する傾向が出てくる。成績が伸び悩んでいる生徒に対しては、学年の初めに1年生のときの成績を自分で分析させ、どの科目のどこが悪かったのか、どこでつまずいたのか気づかせる。そのうえで、担任が「ここはこういうふうに勉強したらどうか」と方向性をアドバイスするといいだろう。

3年生になると大学受験を控え、焦って応用問題や難しい問題に飛びつく生徒が出てくる。学年初めではまず基礎固めが大切であることを理解させ、一歩一歩学習を進めさせるようにする。

進路指導・学年の目標を提示し、具体的な取り組みを説明する

進路学習は一般に自己理解→職業研究、学部・学科研究→志望校選択という流れで進む。年度当初には生徒たちにこれからの1年間における進路学習の目標を確実に伝えたい。そして、進路学習としてどんな行事があるのか、その目的はなんなのかを理解させ、進路学習にも自分なりの問題意識を持って臨むように訴えたい。

進路指導は、進路について考えることの重要性に気づかせることから始まる。最近は、明確な目的意識を持てない生徒が増えているといわれているだけに、将来設計をしてそれを実現するために高校時代を過ごすという意識を持たせることが、まず求められる。進路学習は時間をかけてじっくり取り組んで初めて効果が出るものなので、学年の最初にその重要性を説明して、早い時期から研究させるようにしたい。

学年団の取り組み・足並みをそろえた指導をする

新年度からの指導を効果的に行っていくためには、学年団である程度の方針を出して確認し合い、足並みをそろえることも大切である。

生活習慣については遅刻をさせないことを中心に指導する、学習指導では授業を大切にさせる、進路指導では早い時期から進路学習に取り組ませる、といった重点項目を決めておくと、担任の側も指導しやすく、学年団で足並みをそろえて動くことができる。

面談を行う場合も同じことがいえる。学年団の間で、例えば中間テストのあとに面談をやるということを決めておけば、スムーズかつ統一して面談を進めることができる。部活に入っている生徒の場合、何年生はこの日（週）に全員放課後に面談があるとわかっていれば、面談を優先させやすい。

学年の中にいい雰囲気を少しでも早くつかんだクラスがあれば、そのクラスの具体的な取り組みを学年団で検証、実践していく。あるクラスのよい面を学年全体に波及させるためにも、学年団の足並みはそろえたい。

学年初めに行う

生徒実態調査の目的と活用法

多くの高校では、既に生徒実態調査のためのなんらかの取り組みを行っているだろう。ここでは改めて、生徒状況の把握のためのポイントと、収集データの活用法を述べていく。

生徒に自分の現状を気づかせる効果

学年初めに行う生活習慣調査・学習状況調査・進路希望調査などの実態調査は、生徒に自分の現状に気づかせる面と、担任が生徒を把握するという二つの面がある。

生徒は調査表に書き込むことを通して、自分が今どんな状態で、どの点を反省すべきか気づくようになる。例えば、気が向いたときにしか勉強しない生徒が、学習状況調査の「1日にどのくらい勉強時間をとりたいか」「実際は1日どのくらい勉強しているか」という二つの質問に答えるうちに、「自分は勉強時間が足りないのでは」と気づくきっかけを与えられることになる。

進路希望調査なら、特に低学年の場合は進路について一度も考えたことがない生徒も少なくないので、進路希望調査で初めて自分の将来を考えるといったことも起こりうる。進路を考えることの重要性に気づかせるだけでも、調査の意味は十分にあるといえる。生活習慣調査の場合は、単に基本的な生活習慣が身についているかだけでなく、「この高校を選んだ理由」「どんなときに満足感を感じるか」「悩みをだれに相談するか」といった幅広い質問項目を設けることで、自分の生活を客観的に振り返ることができるようになる。

さらに調査の集計結果をクラスで発表すれば、自分の勉強時間は少ないのか、進路についての考え方は十分なのか、きちんとした生活をしているのかといったことを、客観的数値の中に自分自身を位置づけて考えることができる。これによって、例えば勉強時間の少ない生徒も、教師に直接指摘されて反発してしまうこともなく、集計結果として数値を冷静に受けとめ、心の中で「ちょっとまずいかなあ」と素直に反省するという効果もある。

面談や保護者会の場面で活用する

担任の生徒把握の材料としても、実態調査は大きな役割を持っている。調査では生徒は案外本音を出してくるので、その生徒の本当の姿がわかるという効果がある。また、個々の生徒だけでなく、クラス全体の傾向も把握できるので、クラスの指導方針を立てたりするのに大いに役立つ。さらに学年集計を出せば、その学年の特徴をつかむこともできる。

調査結果はいろいろな場面の中でも積極的に活用したい。まず考えられるのが面談の場。面談は教師と生徒の意見のキャッチボールといっていいが、今の生徒は自分から話をしない子も少なくない。こちらが聞いても「はい」「いいえ」しか返ってこないのではキャッチボールとして成り立たない。

調査結果を手元に「○○部に入っているけど、練習は大変?」「ずいぶん読書時間が多いね。どういう作家が好きなの」といった質問から始めれば、生徒も自分の得意分野、好きな分野だけに、だんだん自分から話をするようになるだろう。また、調査でちらっと顔を出した本音の部分について水を向けると、「実は……」と話し出すこともある。通り一遍の質問に対しては通り一遍の答えしか返ってこないため、生徒が抱えている問題を引き出すことはなかなか難しい。調査結果をうまく利用し、事前に生徒の状況を把握しておけば、生徒の本音の部分を引き出す場として面談をより有効に活用することができる。

また、学習指導、進路指導においても、調査結果を基に、より踏み込んだ適切な指導が可能となる。生徒も、充実した面談の時間を過ごすことができれば、「先生と話してよかった。これからがんばろう」と前向きな気持ちを持つようになるだろう。

保護者会の場でも調査結果は大いに活用できる。保護者にはまず生徒の本当の姿を知ってもらうことが必要だが、調査結果はそのための格好の材料となる。特に、家庭学習時間などは保護者にも端的に理解できるものの一つである。例えば、クラスの平均学習時間が2時間を割っているなら、その現実を知ってもらう。そして、学校としては最低2時間は家庭学習をしてほしい、この学習時間では基礎学力がきちんと定着できるか心配だということを理解してもらい、そのうえで学校あるいは各担任の対策・方針を伝えるようにする。客観的数値を示せば保護者の納得も得やすい。

なお、調査はフリーアンサーの項目だけでなく、選択肢から選ぶようなものを盛り込めば集計が楽になる。必要なら項目の下に空欄を設けて、「その理由」などとして生徒が思っていることを記述するスペースを設けるようにするといい。

生徒実態調査の質問例

生活習慣調査　質問例

- 本校を選んだ理由
- 本校に入ってよかったと思うか
- 高校生活は充実しているか
- 高校生活で大切にしているのはなにか

選択肢
授業、部活、学校行事、生徒会活動、学校外活動、友人関係、先生との関係、など

- 部活に入っているか。入っている人はその部活名
- 部活のある日の平均帰宅時間
- 部活と勉強は両立できているか
- 1日の平均睡眠時間
- 1日の平均テレビ視聴時間
- 1日の平均音楽鑑賞時間
- 1日の平均読書時間
- 1日で自分の趣味に使う時間
- 1日で家族と会話する時間
- 1日の中でムダだと思う時間
- 1か月の小遣いはどれくらいか
- どんな種類の本を読むか
- どんなときに高校生活に対する満足感を感じるか
- 悩みごとはあるか。それはどんなことか

選択肢
勉強、進路、友人関係、異性関係、家族のこと、自分の性格・容姿、答えたくない、など

- 悩みをだれに相談するか

選択肢
友人、家族、先生、だれにも相談しない、など

学習状況調査　質問例

- 得意科目、苦手科目はなにか
- 授業は難しいか。難しいと思う科目名
- 授業がわからないときどうするか

選択肢
参考書などで調べて自分で解決する、だれかに聞く、そのままにしておく、など

- 授業を集中して聞いているか
- 友達同士で勉強を教え合うことはあるか
- 自分が目標とする1日の平均勉強時間
- 実際の1日の平均勉強時間
- 毎日勉強しているか
- 家に帰ってから勉強を始めるまでの時間
- 予習、復習する科目
- 学校以外の勉強をしているか。している場合、それはなにか

選択肢
塾・予備校、通信教育、家庭教師、など

- 日ごろの勉強のしかた

選択肢
二者択一、以下の項目を聞く
A.日ごろからコツコツと勉強
B.テスト前に集中して勉強
A.嫌いな科目も勉強
B.好きな科目だけ勉強
A.隅々まで理解
B.重要なポイントのみを押さえる
A.自発的に勉強
B.家族にいわれて勉強
A.授業重視
B.塾重視

進路希望調査　質問例

- 高校卒業後の進路についてどのように考えているか

選択肢
4年制大進学、短大進学、専門学校進学、就職、未定、など

- 進学予定者は学びたい学問が決まっているか。それはどんな学問か
- 進学したい学校はあるか。その学校名
- 将来就きたい職種があるか。それはどんな職種か
- 進路について親と話し合うか
- 進路について親と意見が合うか
- 進路について友達と話し合うか
- 進路についてどんな不安があるか

選択肢
学力不足、なにに向いているかわからない、なにを勉強したいかわからない、どんな職種に就きたいかわからない、進路情報の不足、経済面、親と意見が合わない、など

- 進学する大学を決める理由として大事だと思うものはなにか

選択肢
学びたい学問が学べる、就きたい職種に就くために有利、教授陣が充実、設備が充実、国公立大である、難易度が自分に合っている、取得したい資格がとれる、授業料が安い、大学の立地条件、学風・環境、など

- 進学に向けて知りたいことはなにか

選択肢
受験勉強のしかた、入試制度、入試の難易度、学部・学科の内容、志望校の学風・環境、推薦入試の制度、志望校の就職状況、大学生活、奨学金制度、など